

## ＜方法論研究会「哲学史のドクサを問う—〈合理論と経験論〉の再検討—」連続研究会＞報告

大野 岳史

### 趣旨

多くの哲学・哲学史入門書の中で、カント以前の近世哲学には二つの流れがあり、それは大陸合理論とイギリス経験論である、と記されている。そして、カントはこれら二つの流れを総合した人物として捉えられることになる。しかし、実際には合理論の中に経験論的傾向をもった哲学があり、経験論の中にも合理論的傾向をもった哲学がある。例えば、合理論の中で経験論的傾向をもった哲学者としてガッサンディやコンディヤックが、経験論の中で合理論的傾向をもった哲学者としてカドワースやモーアなどが挙げられる。

一般に、17世紀から18世紀中葉の哲学は〈合理論と経験論〉という対立関係にあるものとみなされてきた。しかし、単純に「対立関係にある」と理解するだけでは、合理論の研究者と経験論の研究者が、互いに相容れないものとして半ば無視し合っているような状況を作ってしまうだろう。少なくとも、17世紀から18世紀中葉の哲学についての理解は、このような状況に近いと言えるのではないだろうか。こうした状況の根本には、「合理論」と「経験論」という二者択一を迫る哲学史理解だけでなく、それぞれの研究が先鋭化することで他の哲学に深く入り込まなくなっていることもあるだろう。こうした状況を打破するために、「合理論と経験論」という枠組みそのものを再検討する必要がある。そこで哲学史の新たな可能性を拓き、新たな知見を見出すために、「〈合理論と経験論〉の再検討」をテーマとした連続研究会を行った。ここで各発表を紹介するとともに、この連続研究会においてそれぞれの発表がどのような意義をもちうるのか、私個人の所見ではあるが、提示することで報告とする。

### 藤坂大佑（東洋大学大学院文学研究科哲学専攻博士後期課程）

#### ジェームズの思想展開における「合理論・経験論」の対立軸の考察

ウィリアム・ジェームズは、合理論と経験論の対立をヴィジョンの違いとして捉え、その違いは「気質の違い」に由来すると考える。前者は「軟らかい心の人」による哲学で、後者は「硬い心の人」による哲学である。それぞれの真理観がそこで形成されるが、気質の違いに過ぎないため、両者には優劣はなく、対立そのものが問題とされる。そこでジェームズは、それぞれの気質がそれぞれの哲学を選択し「生のヴィジョン」に差異が生じることを考察し、観念と実在との一致として真理を認めるプラグマティズムの観点に立つ。プラグマティズムは一見して経験に依拠するように思われるが、それは一般的な意味での経験ではない。ジェームズが考える経験は「根本的経験」であって、経験の流れに徹底的に依拠する。学説上の理論的解釈にとどまることなく、生の流れそのものに基づくことが、プラグマティズムを合理論と経験論の対立を超越する哲学として特徴づけている。

藤坂氏の発表によって、ジェームズのプラグマティズムが、合理論と経験論の対立を克服し、新たな真理観の可能性を開いたことが明らかになった。合理論と経験論の対立は理論上のものに過ぎないかもしれないし、17-18世紀の西洋哲学を表現するためには、不十分な構図かもしれない。それでも、新たな哲学を模索するための土台たりうることを示されただろう。

## 笠松和也（東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻博士課程） 経験と理性の間で—スピノザ哲学における「目的」と「欲求」

スピノザは、初期著作『知性改善論』の冒頭で、通常の生における経験から出発し、すべての学知を人間の最高の完全性の獲得へと向ける歩みを示す。そこでは「すべての学知を一なる目的に向ける」とされるが、主著『エチカ』では目的性の排除された欲求概念のもと、真なる認識が自己保存のコナトゥスと結びつく。「徳」「最高善」「至福」は精神のコナトゥスに帰せられ、また神を認識することである。こうして実践的な場面すべてを「知ること」が覆い尽くすことになる。したがってスピノザ哲学において経験を重視するか理性を重視するかということが問題なのではない。「知ること」の範囲、強度、その根拠を事柄に即して説明することが、合理論と経験論を単なる学説とみなす理解を超えて、近世形而上学が提示する理論を理解するために必要なことである。

先の藤坂氏の発表は主として「根本経験」によって合理論と経験論を超える試みだったが、笠松氏の発表は「知ること」が倫理的諸概念の内実を組み替え、そうして「知ること」に基づいて合理論と経験論を超えようとする試みであった。それを可能にするきっかけは「目的」概念の排除である。笠松氏はとりわけウイティキウス『アンチ・スピノザ』における批判と対比して、スピノザが既存の欲求概念に伴う目的性を排除したことを強調している。既存の概念とそれら概念に基づく体系を改変した事例が提示されたと言えよう。

## 寅野遼（国際哲学研究センター PRA） 真理と歴史—スピノザ『神学・政治論』第7章における「聖書解釈の真なる方法」について—

スピノザ『神学・政治論』は、聖書を極めて厳しく批判し、今日の政教分離や思想と言論の自由にも連なる著作だとされている。ここでの聖書は、様々な経験（あるいはヒストリア）の堆積として成立しており、その解釈方法は、[1] 聖書に関するヒストリアを集める、[2] 聖書に関する一般的な法則を確立する、[3] この方法によって明らかにならない部分についての解釈は断念する、という要素で成り立つ。こうしてスピノザは経験同士の連結と統一によって経験の内容を精練することで、経験の堆積を内的に読み解こうと試みるが、結局は別の経験が必要となり、聖書の字句を確実に解釈するにはいたらない。とはいえ、『神学政治論』は哲学と神学の分離を提唱しており、この方法では数学的確定性を得られないからといって、理性による独断的な解釈が試みられることはない。聖書による道徳的教えが求めていることは敬虔と服従であり、これは経験を内的に読み解こうとすることも理性による証明も必要ないのである。

寅野氏の発表は、笠松氏が提示した実践的な場面すべてを「知ること」が覆い尽くすという『エチカ』の倫理とは、異なる位相にあるものとして、『神学政治論』における聖書解釈を明らかにしたと言えよう。さらに、その方法と理性による論証がともに必要とされない領域として、道徳的教えが顕わになった。寅野氏は「経験と理性の分離の現れ」と「理性でとらえたものが実際の経験と一致する」場面の両方を見据えている。これら両方が両立する新しい位相が提示されたと言えよう。

## 渡辺博之（国際哲学研究センター客員研究員） 「スピノザにおける「合理主義」と「経験」について」

ヘーゲルによれば、合理主義と経験主義の対立は実際にあるが、それがつきつめられることはない。内在的思考が内外の経験からも内容を得るという仕方では、合理主義に経験的方法が入り込むためである。実際、スピノザは定義からはじめるが、ロックにおいては個別の経験をもとに一般観念が成立し、その一般観念が定義や公理の形でしめされることが明らかにされる。こうしてスピノザは合理主義に位置付けられるが、とりわけゲルはスピノザ哲学を完全な「知解可能性」に基づく「絶対的合理主義」の体系であると考えた。他方、アルキエによれば、明晰判明な観念から出発するデカルトとは異なり、スピノザのいう「十全な観念」はそれを意味づける形而上学的経験を伴っていない。そのため、「十全な観念」により幾何学的に構築された体系であるスピノザ哲学を理解することは

(comprendre) できない。しかしながら、モローは「我々は我々の永遠であることを感覚し経験する」と『エチカ』で語られていることを重視し、絶対的合理主義でありながら「理性」は常に経験に結び付けられると解釈する。このことが、現在のスピノザ研究の一つの方向性を示しているように思われる。

渡辺氏の発表は、スピノザ解釈史における理性と経験の問題を辿り直すことで、合理論と経験論との「とことんつきつめられた」対立のなかにスピノザを位置付けられないことを明らかにしただろう。ここでスピノザは絶対的合理主義と称されながらも、「我々の永遠であること」の経験によってその体系は意味をもつようになる。本研究センター編『越境する哲学』（春風社、2015年）第17章を読むことで、このことへの理解は深まると思われる。

## 竹中久留美（東洋大学非常勤講師）

### 「ない」という指摘の視点—ヒュームの場合—

ヒューム哲学において、単純観念はすべてそれらに対応する単純印象に由来するが、その例外ともなりうる事例があることが指摘される。その事例とは、特定の青の色合い以外であればすべての色を知っている人が、その特定の色合いだけを除いて濃いものから淡いものへと移行させて並べたとき、その人は色合いが欠けている空所に気づき、想像力でこの欠落を補うだろう、というものだ。ヒュームはこの矛盾を簡単に片づけてしまうが、それはなぜなのか。この問題は Missing Shade of Blue と呼ばれる。ヒューム哲学にそって考えるのであれば、次のようになるだろう。他の色合いの系列から色合いの程度差を見て取り、それを青の系列にも適用することで、その空所に気づくことができる。この適用は観念間に類似を見出す知性的働きに重きを置くことで説明でき、だからこそヒュームはこの矛盾を簡単に片づけるのだろう。空所に気づいたときには、すでに何がそこに埋まるべきか分かっているのだ。

竹中氏の発表は、「経験していないものと現前していないもの」を区別するものであり、プラトン『メノン』における探求のパラドクスから続く、知識論にかかわる問題を提起しているだろう。つまり「知らないものを探求できるのはなぜか」という問題が、Missing Shade of Blue では「現前していないもの（空所）を語ることができるのはなぜか」という問題になっているのかもしれない。「ない」ものは知の対象になりえないと思われるかもしれないが、「何がないか分かっている」という知のあり方が示されるのである。

## 大野岳史（国際哲学研究センター研究員）

### 『ポール・ロワイヤル論理学』の観念論における感覚と想像

17世紀の大学で広く認められていたテーゼとして、「先に感覚のうちになかった何ももの知性の中にない」というものがあり、これをガッサンディは「観念はすべて起源を感覚に有する」と言い換える。感覚が想像の前提となり想像が知性的前提となる認知システムが変更されたことになる。ガッサンディにおいて観念形成は想像によって果たされるが、『ポール・ロワイヤル論理学』では、想像におけるイメージと観念とを混同しないように注意される。ここで「観念」とは、「私たちの精神のうちに在るものすべて」である。そして感覚的イメージを伴わない「存在」や「神」の観念のように、感覚を起源としえない事例をもとに、先のガッサンディのテーゼが否定される。たとえ感覚を観念の起源として認めたとしても、観念と感覚された対象とがまったくかけ離れている可能性が残される。こうして『ポール・ロワイヤル論理学』では、感覚・共通感覚の経験が真理認識論から取り除かれることになる。

この発表では、『ポール・ロワイヤル論理学』において感覚的経験がもたらす知識が不確であるとみなされ、非常に限定した仕方でのみ語られることが示された。このことは、従来の認知システムとは別のところでの真理探究を進め、そして感覚的経験に依拠しない方法論を確立する可能性が開かれたことを意味する。

野村智清（東京大学助教）

## 「大陸合理論とイギリス経験論－アノマリーとしてのアイルランド哲学」

Loebは17世紀から18世紀に至るヨーロッパ哲学史を大陸合理論とイギリス経験論の対によって理解する立場を「標準的理論」と呼び、それに対する批判者の見解を「アノマリー」と呼ぶ。このアノマリーの一つとして、Bermanが主張したアイルランド哲学が存立するという解釈がある。ここでのアイルランド哲学とは、1690年代から1750年代の間に興隆した「連続的な哲学的伝統」の存在によって確認され、「神学的表象主義の導入」と「産まれながらに眼の見えない人の例の採用」によって特徴づけられる。これらの特徴づけは、標準的理論にはない新たな重要性を提起しているため、アノマリーであると言えるが、ロックとステイニングフリートの論争にも見られるため、アイルランド哲学の存立を肯定しているわけではない。したがって別の仕方でもアイルランド哲学の存立を主張できるかという課題が残され、その可能性として、哲学的営為の論理的配置という観点を挙げることができる。

野村氏の発表は地域名哲学の存立に焦点を絞ることで、哲学の分類方法についての視座を提供しているだろう。独自性による哲学分類は、「他にはない独自性」に基づかなければ、厳密な分類にはいたらない。「合理論」と「経験論」を別の分類だとしても、本研究会の趣旨で記したように、経験論的な合理論、あるいは合理論的な経験論が出てきてしまう。単純に時代と使用言語で分類する場合もあり、哲学を分類する仕方は様々である。「論理的配置」による分類がどのような帰結をもたらすのか、今後の研究に注目したい。

## おわりに

今回の連続研究会で、「合理論」と「経験論」を主軸に議論を積み重ねてきた。合理論の研究者と経験論の研究者の相互理解に関しては、今後も研究会を続けていく必要があるが、ここで一旦区切りとなる。今回の連続研究会の中では、「合理論と経験論の対立」という理解を肯定するか否定するかに関わらず、それぞれの哲学研究の新たな可能性が模索されている点は、共通していただろう。大別・類別された枠組みでは説明できないところに、それぞれの哲学者の独自性は存在しうる。枠組みの中に入る哲学者たちに共通している事柄は、それぞれの哲学者の独自性とは言えないからである。したがって、一旦大別・類別した上で、それだけでは説明できないものを探求することも、一つの方法となりうる。それぞれの発表者がこの方法を実践したことは、今後の研究に活かされるだろう。